

# 石黒忠篤と民俗学周辺

郷土会での活動を中心に

和田 健

Tadaatsu Ishiguro and Periphery of Folklore Studies : Focusing on His Activity at Kyodokai  
WADA Ken

はじめに

- ① 石黒の業績と生涯そして民俗学周辺の人々との関わり
- ② 郷土会と石黒の関わり
- ③ まとめおよび今後の作業について

## 【論文要旨】

本稿では近代農政史上中核的人物であった石黒忠篤の業績と柳田國男との接点である郷土会での活動を中心に検討を試みたい。その目的は、柳田が考えていた農村観・農民観が石黒の施策の中にどのような影響を与え、そして官僚、政治家として石黒がそれをどのように実践していったかを明らかにするところにある。その当初の場が新渡戸稲造を中心とする郷土会での活動であったからである。

まず石黒の生涯を概観しながら、彼の生涯を通しての郷土研究や民俗学と関わる人々との接点を明らかにする。そして石黒が農村、農家、農民に対して興味関心を示した経緯と、のちに農政官僚として取り組んだ施策とどう関連するかについて言及した。そして次に、石黒が積極的に参加した郷土会での例会報告の分析を行った。それにより彼がのちに実践する小作慣行調査、食糧管理制度の端緒となる米価調整対策そして戦時体制下直近における農山漁村経済更生運動における施策に示される問題意識を探る。石黒の郷

土会における報告は、農村、農家における口碑、旧来よりの社会組織をおさえた上での農村の歴史的背景を考慮する視点を垣間見ることができる。石黒は「部類の調査好き」を自認し、全国的な米の生産費調査、小作慣行調査をしたことはよく知られている。それらの大がかりな調査に対する問題意識が郷土会での活動報告により確認することができる。

柳田と石黒に共通している近代的な農村、農民意識は、より深い検証が必要ではあるが「旧来よりの慣行を考慮した労働の協同性とそれを踏まえた上での合理的組織の確立」「自立した経営ができる中核的人物の養成」であると筆者は認識している。そのことを考察する端緒が郷土会で示した石黒の取材報告に現れていると思われるのである。

【キーワード】 石黒忠篤、農政官僚、柳田國男、郷土会、農業施策

## はじめに

日本の近代農政を考える上で、石黒忠篤が中心人物のひとりであり、また彼の農村・農民への強い関心が、あらゆる施策に大きな影響をもたらしていることは周知の事実である。さらに突き詰めれば、石黒は基本的には農村（あるいは「村」と広くくって考えてもよい）を協同性の基礎的単位としてとらえたうえで、自立性ある個人の育成を施策の中でめざしていた、と考えられる。

柳田國男、洪沢敬三をはじめ、広い意味での民俗研究者との関わりと、石黒の行った施策との関連性を考えてみると、村にみられる協同性とそこに住む人たちの意志決定の論理に強い関心を持っていたように思えるのである。

石黒に関わる研究は農業史、農業経済史の中でいわゆる農本主義者の評価があることもまた事実である。その評価に対しての論及は本稿では行わないが、少なくとも農村、農家、農民に対しての国家介入と中央集権的系統化が石黒の農業施策の結果である、という歴史的事実として捉えて間違いないだろう。例えば国家の介入<sup>(1)</sup>という意味では米価調節からはじまった食糧管理制度や満州開拓移民を作り出した農山漁村経済更生運動における施策が大きく影響を与えている。しかしながら石黒の施策は農村、農家、農民の現状を掌握してから施策を進められていることも、間違いない歴史的事実である。

本稿では、石黒の生涯をみていきながら、農政の施策に関わる中で民俗学周辺との関わりがもたらせた影響について概観してみることとする。そして一九一〇年代における郷土会での活動を検証し、彼自身の農村、農家、農民に対する問題意識のあり方を読み解くものとする。そのうえで柳田の農政論と石黒の農政論はどの部分が同調しているのかを別

稿で検証するための予備的考察として課題を述べてみたい。

## ① 石黒の業績と生涯そして民俗学周辺の人々との関わり

### (一) 石黒の生涯に関わる記述とテキストについて

まずは石黒忠篤の生涯についてふれていくが、その前に石黒の生涯について書かれた文献について簡単ではあるが説明をした上で、それぞれを底本にしながらか整理、検討を行いたい。

石黒自身は筆無精といわれ、あまり彼自身による著作は残されていない<sup>(2)</sup>。その中でもっとも自身が書いたものに近いといえるのが『農政落葉籠』（一九五六年）である。もっともこれとて石黒が一冊にするために書き下ろしたものとはいえず、自序によると笹村草家人が編者となって上梓されたものとなる。このとき石黒は七十二歳であり、生涯を七六歳で終えることから、この本は晩年に取りまとめられたものである。つまりこれは石黒の自叙伝というよりも、それぞれの時局において書き記したものを集めたものである。この中では『郷土会記録』『文藝春秋』といった中に小文として掲載されたものなどで構成されており、時代の局面における石黒の考え方が垣間見られる書物である。彼自身の農業観、農村観を示した単著がない分、この著書は貴重な資料と筆者は考えている。

人物伝として書かれてある代表的なものには小平権一によって書かれた『石黒忠篤 一業一任伝』（一九六二年）がある。小平は農政官僚の後輩として石黒とは密接なつながりを持っている人物である。その立ち位置からは、戦後特に石黒の農本主義的な思想に対しては批判的な評価を受けることに対して、内側で近接して関わった立場で石黒のことが記述されているところが興味深い。テキストとして読み直すには著者の立ち位置は考慮しないとはいけないが、石黒の施策や活動に関して、さらに

官僚になる前の少年期についても詳述されており、貴重な資料と位置づけられよう。

石黒の生涯に関しては、この二点を中心にしながら適宜周辺資料を参照することでその流れを概観していきたい。なおこの二つの資料を中心にしながら略年譜を【表1】にまとめてあるので参照いただきたい。

## (二) 石黒の生涯と結節点について

石黒は生涯を七六歳で幕を閉じている。その生涯を彼の役職など立場を踏まえながら以下の流れに分類してその折々の活動を概観してみたいと思う。

### a. 官僚期―生涯から学生時代

石黒は一八八四（明治一七）年に東京市牛込で生まれる。先に農商務省に勤務する柳田國男は一八七五（明治八）年生まれであるから、九歳違いの先輩、後輩であるといえる。一九〇一（明治三四）年東京高等師範附属中学校を卒業したが、第一高等学校には不合格、鹿児島にある第七高等学校に入学する。

しかしながら第七高等学校での出会いが、彼の農政官僚として、いや農業に関わる仕事に傾注する基盤となったといえる。特に、当時第七高等学校の教師であったジェームス・マードック<sup>(3)</sup>と同期生である東郷茂徳との出会いが、石黒に大きな影響を与えているのである。

石黒の父は初代軍医総監であった石黒忠憲であるが、父忠憲は息子忠篤に対して、司法官になるように勧めていたようである。ただし忠篤は「百姓の世話をする仕事をやってみよう」という考えを持っていたようである（小平 一九六二年 二四頁）。この当時、第七高等学校の先生であったジェームス・マードックは、そんな石黒の考えを肯定的に受け入れながら、さまざまな本を紹介してくれたようである。そのなかで石黒はマ―

ドックから二宮尊徳について著作などを紹介されたという。石黒自身の中に農本主義者としての評価を受ける基盤となるきっかけであろうかと思われるが、ここではその思想的評価は留保しておきたい。石黒は二宮の足跡をさまざまな文献を読みあさり、いわゆる報徳思想について考えるきっかけとなったことは推測される。のちに石黒は一九五五（昭和三〇）年一月に「二宮尊徳百年祭に因んで」というタイトルで二宮の思想的評価について言及している。全国農民連合新聞に談話の形で掲載されたものであるが、ここで貧乏と真正面から取り組んだとしてカール・マルクスと比較して二宮のことについて触れている。「マルクスは思索を重ねてああいう方面にいつたが、二宮先生はあくまでも現実と取りくんで、直接多勢の人たちに幸福をもたらすよう努力され、その根底になつたものが報徳精神」と述べている。報徳精神についても「もつと世界的視野と現代的な感覚で真剣に見直すべきとき」（石黒 一九五六 一九四頁）と評価している<sup>(4)</sup>。彼の思想的基盤に二宮の報徳思想の影響があることは想像に難くないことだが、その出会いは第七高等学校時代であることは間違いない。

また、第七高等学校では生涯の知己となる東郷茂徳との出会いがある。東郷は鹿児島出身であるが、東京から遊学している石黒とはここで出会っている。東郷は一九四一（昭和一六）年東条英機内閣で外務大臣兼拓務大臣を務めている。ちなみに石黒は同年第二次近衛文磨内閣では農林大臣を務めている。石黒はこの年、大臣を免官したのちに七月に農業報国連盟理事長として一九四二（昭和一七）年六月に財団法人満州移住協会理事長に就任している。一九三〇年代より小作問題の解決の糸口として満州を拠点とする政策を推進していたが、戦時体制下に入りこの満州政策においても大臣と財団法人理事長という要職でこのふたりは何かしらの接点を持つことになる<sup>(5)</sup>。

表1 石黒忠篤の活動およびその周辺に関する略年譜

和暦 (西暦)	年齢	石黒の役職、活動などに関わる事項	政策および社会的なできごとなど関連事項	関わった主な人物
官僚前（生誕から学生時代）				
明治17 (1884)	0	東京市牛込区揚場17番地に生まれる。 (父石黒忠恵、初代軍医総監、ちなみに柳田国男は明治8年生まれ。石黒とは9歳違い。)		東郷茂徳 (7高同期) ジェームズ・マードック (7高の先生)
明治33 (1900)			柳田国男農商務省農務局勤務	
明治34 (1901)	17	東京高等師範附属中学校第10回卒 (第一高等学校不合格、第七高等学校(現：鹿児島大学)へ進学)	肥料取締法施行(12月)	
明治37 (1904)	21	第七高等学校第1回卒。		
農政官僚時代Ⅰ（郷土会での活動、欧州留学）				
明治41 (1908)	24	東京帝国大学法科大学法学科卒業(7月11日) 任農商務属農務局勤務命じられる(7月14日) 高等試験行政科試験合格(11月27日) 穂積陳重次女光子と結婚(11月28日)	肥料取締法改正法律案(10月施行)	穂積陳重
明治43 (1910)	26	任農務局事務官		新渡戸稲造
明治45・大正元 (1912)	27	郷土会にて「豊後の由布村」「湯坪村と火焼輪知」「鹿島の先の新田」の報告		柳田国男
大正2 (1913)	29	郷土会第15回例会(新渡戸稲造宅)石黒報告(3月2日) 「農家の構造について」 任山林事務官兼農商務書記官、農政局勤務命じられる(6月13日)	雑誌『郷土研究』刊行	
大正3 (1914)	30	欧州留学のため休職願出す。 同時に農商務省から欧米各国における農政に関する機関の組織および運用に関する事項の調査を委嘱される(6月26日) 「欧米各国へ私費旅行ノ件認可ス」「欧米各国ニ於ケル農政ニ関スル機関ノ組織及運用ニ関スル事項ノ調査ヲ委嘱ス」(農商務大臣辞令)		加藤莞治
大正4 (1915)	31	欧州留学より帰国(8月) 任農務局事務官兼農商務書記官(8月17日) 郷土会第37回例会「地方生活の比較研究の必要なることを鎌の大小と用法、砥石の種類などを取り上げて話す。」(12月12日)	米価調節調査会(10月) (政府の米価常時調節の方針に基づいたもの。米の生産費および農家の生計費の上で許される米価の限度を探ることが目的。農商務省総動員の調査。忠篤は飯岡清雄技師と組む調査に関わる。)  山形県立自治講習所設立(12月) (初代所長加藤完治)	
大正5 (1916)	32	病気のため休職静岡県で静養		
農政官僚時代Ⅱ（石黒農政の始まり）				
大正7 (1918)	34	農務局副業課長命じられる(5月14日)	米価の暴騰：米騒動	
大正8 (1919)	35	農務局農政課長命じられる(7月9日)	米の生産費調査、農家経済調査、農業経営調査など研究し、部下に指示を与える。	大槻正男 志村源太郎

大正9 (1920)	36		小作調査委員会設置 農政課に小作分室設置（小平分室長にする）	桑田熊蔵 小平権一 小野武夫 芹沢光治良
大正10 (1921)	37		米穀法公布（4月） （臨時的米価調整から恒久的米価調整へ）	
大正11 (1922)	38		小作慣行調査まとまる（明治17年の簡略化した調査以来2回目の調査）	
大正13 (1924)	40	任農商務事務官兼農商務秘書官（9月10日） 農務局小作課長命じられる（9月10日） 小作調停法成立 任農商務省農務局長命じられる（12月1日） 産業組合中央金庫評議員命じられる（12月）		
大正14 (1925)	41	農商務省、農林省へ機構改正、農林省農務局長（4月1日）	米穀法第1回改正（3月） （米価調整に数量調節、市価調節も加える→米価調整の徹底） 日本国民高等学校協会の設立認可（12月） 柳田編『郷土会記録』刊行	
大正15、 昭和1 (1926)	42	日本国民高等学校協会理事長就任	日本国民高等学校設立認可（現在の茨城県友部町）（初代校長、加藤莞治）	
昭和2 (1927)	43	蚕糸局長（5月25日）蚕糸局は新設、石黒は初代局長		
昭和4 (1929)	45	農林省農務局長（7月9日）	世界恐慌、五・一五事件 肥料管理法案の提出（衆議院は政友会絶対多数で通過したが、貴族院で審議未了） 肥料配給改善方策要綱（農村不況対策の一環、肥料の安価な安定供給をめざした取り決め）	
昭和6 (1931)	47	任農林次官（12月14日）	米穀法第2回改正 （米価の基準価格の制定→米価調整のさらなる徹底）	
昭和7 (1932)	48		農林省経済更生部設置（経済更生部長：小平権一） 農山漁村経済更生運動の開始（9月） 日本国民高等学校が満州移住協会共同で事業運営を始める。（青年訓練生学校で3ヶ月養成し、満州に移出させる） 政府による満州移民政策始まる。	
昭和8 (1933)	49		米価下落状況（朝鮮、台湾から大量の米が移入、内地産米価が下がる）	
昭和9 (1934)	50	依願免本官（農林省農林次官退職）（7月10日）	農村更生協会設立（12月）	
戦時体制下（農村更生協会会長、農林大臣、貴族院議員から公職追放まで）				
昭和10 (1935)	51	社団法人農村更生協会会長となる。（12月）		早川孝太郎 今和次郎
昭和11 (1936)	52		早川孝太郎農村更生協会囑託に（5月）	
昭和12 (1937)	53	産業組合中央金庫理事長命じられる（6月7日） 農村更生協会主催山村更生研究会（岩手県湯口村:現花巻市）（7月13日から3日間）	日中戦争	
昭和13 (1938)	54	八ヶ岳修練農場開場（4月3日） 農村更生協会主催山村更生研究会（埼玉県林業試験場）（11月14日から3日間）	早川、協会の主事となる（協会での本格的活動の開始）	



昭和14 (1939)	54		朝鮮半島大旱魃、移入米途絶え米不足。	
昭和15 (1940)	56	任農林大臣(7月24日)		
昭和16 (1941)	57	父石黒忠恵死去97歳(4月26日) 依願本免官(農林省農林大臣)(6月11日) 農業報国連盟理事長となる(7月)	太平洋戦争	
昭和17 (1942)	58	財団法人満州移住協会理事長となる(6月) 財団法人日本農業研究所理事長となる(10月)	食糧管理法(2月) (→国家による食糧管理体制の強化)	
昭和18 (1943)	59	貴族院議員勅撰(1月14日)	農業団体法公布(3月) (→「農業会」体制へ、部落単位とした農事 実行組合の系統化)	
昭和20 (1945)	61	任農商大臣(4月7日) 依願免本官(農商大臣退職)(8月17日) 全国農業会会長命じられる(9月) 依願免(同会長退任)(10月)		
戦後期Ⅰ：公職追放から解除まで				
昭和21 (1946)	62	昭和21年勅令第109号に基づき同令第一条の 覚書該当者と決定する。 公職追放(8月)	早川、農村更生協会辞職(1月)し、全国農 業会高等農事講習所勤務	
昭和22 (1947)	63	日本農業研究所退職、顧問となる(3月)		
昭和26 (1951)	67	公職追放解除(8月15日付官報にて、指定理 由書取り消し公告される) 農林省顧問に委嘱(10月)		
戦後期Ⅱ：参議院議員(国会議員)時代				
昭和27 (1952)	68	静岡県地方選出参議院議員補欠選挙に当選(5 月9日) 河井弥八、楠見義男の紹介で緑風会に入会 長崎県対馬来訪(8月8日から5日間) (→早川孝太郎他国会議員、農林、水産など の官僚らと視察。名目は「対馬総合開発の診 断」) 緑風会会務委員になる(11月24日)		
昭和28 (1953)	69	全国農民連合会会長となる(4月) 国際連合食糧農業機構アジア極東地域大会日 本政府代表 (インド・バンガロール)(7月) 欧米諸国視察(7月から10月まで)	離島振興法施行	
昭和29 (1954)	70	参議委員外務常任委員会委員長となる(6月3 日) 北海道開発審議会委員(6月15日) 社団法人国際食糧農業会会長(6月) 国際小農同盟第4回総会に招請され渡米(10月) 全国農業会議所理事(11月) 全国農業協同組合中央会理事(12月)		
昭和30 (1955)	71	農林省顧問(1月) 原子力平和利用調査会顧問兼運営委員(6月) 外務省移住懇談会委員およびアジア懇談会委 員(6月) 新生活運動協会評議員(10月) 「二宮尊徳の百年祭に因んで」(全国農民連 合新聞)(11月) 海外移住審議会委員(12月)		

昭和31 (1956)	72	『農政落葉籠』刊行 (1月) 参議院議員全国区当選 (7月8日) (→早川孝太郎選挙運動に関わる) 社団法人農業労務者派米協議会会長 (7月) 緑風会総務委員会座長 (11月2日)		
昭和32 (1957)	73	緑風会選挙対策委員長 (7月10日) 社団法人国際農友会会長 (11月)		
昭和33 (1958)	74	ブラジル移住五十年祭農業使節団長として渡伯 (6月) 憲法調査会委員 (10月17日) 収穫祭協会会長 (10月) 緑風会議員総会議長 (12月10日)		
昭和34 (1959)	75	国土総合開発審議会委員 (7月7日)		
昭和35 (1960)	76	上野精養軒で喜寿の祝い (1月29日) 午前一時過ぎ心筋梗塞症にて永眠(3月10日)	農業基本法公布 (1961年施行)	

\*官名は変更のときのみ「任〇〇官」と記した。

\*日付は確認できる範囲のものを記した。

\*年齢は満年齢で記した。

\*〔石黒 1956年〕〔小平 1962年〕〔石黒忠篤先生追憶集刊行会編 1962年〕〔楠木編 1983年〕〔須藤編 2003年〕〔野村他編 1998年〕を参照した。

## b. 農政官僚時代Ⅰ（郷土会活動、欧米視察）

小作問題や米価調整そして満州開拓施策など、いわゆる石黒農政と呼ばれる施策は後年になって辣腕がふるわれる。石黒の官僚としての業績は大きく整理するならば、肥料問題、小作問題、繭糸振興策、米価調節、各種農業調査の開発の五点が挙げられよう。しかしここではそれらの活動の先導的立場になる前段階となる若き農政官僚時代の活動について整理しておきたい。まず三二歳で病気休職するまでの間を整理しておくこととする。石黒はこの若き時代に新渡戸稲造、柳田國男たちと郷土会での活動を行っているのである。郷土会での活動報告については後述するとして、その時期に彼がどのような農政上の施策に関わっていたかをここでは整理しておきたい。

石黒は農業の関わりを希望したとはいえ、結局法律に関わる進路を選び、東京帝国大学法学部に進学する。卒業後一九〇八（明治四一）年に農商務省農商務属勤務となり、農政官僚としての第一歩を踏み出す。石黒が二四歳の時である。ちなみに柳田は一九〇〇（明治三三）年に農商務省農務局農政課にて任官のち、一九〇二（明治三五）年に法制局参事官に転じているので、農商務省内での職務上の接点はないことになる。

石黒の農商務省における最初の大仕事は肥料問題への取り組みであり、肥料取締法改正である。日露戦争（一九〇四—一九〇五年（明治三七—三八年））を境に日本での肥料消費量が急激に増えたが、それに伴い粗悪な肥料を流通させる悪徳業者も増えていった。これに関しては一九〇一（明治三四）年に肥料取締法が施行されていたが、改正法は取り締まりを強化するためのものである。ひとことでいえば、砂を混ぜてまた成分を偽って調合するなどの悪徳業者への取り締まりに政府がどれだけ介入するかが改正の大きな柱といえよう。使う側である農家・農民は販売される肥料を業者のいうとおり信じるしかなく、偽りの肥料を流通させることは、売り手の搾取を見過ごすだけである。石黒にとって肥

料業者側に農家・農民側をだます仕組みが横行していることはとても問題に感じていたであろうことは推測できる。<sup>(6)</sup> この肥料業者の取り締まり規則の立案から農政官僚を辞したのちも含めて三〇年近くもこの問題に取り組んだものであり、例えば一九三一（昭和六）年、肥料業者から出される外国硫安の輸入制限の要求に対しても各業者がマル秘とした肥料の生産費についても開示させるなど、肥料業者との折衝は長く彼のライフワークとして取り組んだ問題のひとつであったといえる。

もう一点この時期の大きな仕事としてあげられるのが米価調節の問題である。石黒の思想の根底には「農業と工業とは違う」という考え方があり、と思われる。この考え方は冷静に考えると当然のことなのであるが、科学的効率を万能と考えたとき工業的発想を以てしてすべての施策を考えてしまいがちである。この点に関して、石黒は官僚として任にく当初からその意識を堅持していたようである。戦後、農林技官として全国を歩き近代合理化の文脈での農事指導をしたと述懐している守田志郎もこのような発想に対して疑念を持ち農業と工業の違いについて述べている。<sup>(7)</sup> 石黒もこの時期において、農業の担い手からすれば工業的思想がしつくりいくものではないという立場で、米価問題に関わり相当骨を折る折衝と調整をつづけたであろうと思われる。

一九一五（大正四）年一〇月、米価調節調査会が農商務省内に設置される。これは政府の米価常時調節の方針に基づいたもので、国家が食糧を管理する制度のあり方を定める大きな調査組織であったといえる。この時期米価の乱高下は著しく、大正に入ってからの一九一〇年代は米価の調節が早急の課題であった。農商務省はこの問題に対して総動員体制で取り組み、農家の生産費および生計費に関わる全国的な調査を行うことにより、米価の安定的価格の策定を図ろうとするものであったといえる。石黒もこの問題に関わり米の生産費調査、農家経営調査などを研究し各方面に調査に赴いている。

ここで重要なことはこの調査に基づきながら、恒久的米価調整の根幹となる米穀法が一九二一（大正一〇）年施行されたことにより、食糧管理制度の基礎的なものができたということである。つまり「米価は国家により制御される」という施策の基本ができあがったといえる。この点も農業の根幹は工業的自由競争と同一視して営まれるものではないとする考え方につながる施策であろうし、またそれだけ食糧の作り手である農家、農民も買い手である消費者も苦慮していた問題であったことは明らかである。

石黒はこの調査を契機に、農家に対して熱心に説いたのが農家簿記の改善とその普及であった。農家の自立した経営には各農家の財務管理が必要であるという考え方であるが、この簿記の普及活動は一九三二（昭和七）年から始まる農山漁村経済更生運動でも重点的に行われる施策でもあり、この時期石黒関わった数々の調査が、のちの農山漁村経済更生運動とも連動しているといえる。

そしてこの米価調節の仕事に関わる前年、一九一四（大正三）年から翌年八月まで約一年間欧州各国への旅行に出向いている。私費の旅行であるが「欧米各国ニオケル農政ニ関スル機関ノ組織及運用ニ関スル事項ノ調査ヲ委嘱ス」（農商務大臣辞令）とあるように、ヨーロッパの農政組織と運用の実態を学ぶ機会であったといえる。ちなみに石黒が洋行に持っていく旅行中読んだものに柳田の『遠野物語』がある。<sup>(8)</sup>

郷土会での活動そして遠野物語との出会いは帰国後の石黒の施策とも大きく関わるものであろう。肥料問題も米価調整に関わる施策も、洋行する前後石黒が農政の中で関わる若年期において、直接間接問わず柳田との関わりや郷土会の活動を経て行われたことを確認しておきたい。

### c. 農政官僚時代Ⅱ（農政の中心的立場へ）

ここまで石黒が若年期に着手した肥料問題、米価問題と取り上げたが、



石黒が農政官僚であった時代の最大の懸案は小作問題である。小作問題に関して農商務省は一八八四（明治一七）年に簡単な実態調査が行われていたとはいえ、本格的な実態調査は一九二〇年に小作委員会が設置されたところから始まったといえる。石黒は約二年の病氣療養による休職のち一九一八（大正七）年に農務局副業課長に、そして翌年農務局農政課長に命じられる。石黒が施策を立て実施する先導的な立場となるのがこの時期であり、いわゆる「石黒農政」といわれる施策を農政官僚として進めていくのが課長になったこの時期からであろう。石黒が三四歳の時である。

先に述べた米価調節の基礎的資料となる農家経済調査などいくつかの調査資料の収集を部下に命じながら進めていく。のちに農業会計学の基礎を作る大槻正男や石黒の施策を推し進めていく後輩の小平権一ともこの時期にともにこの問題に取り組んでいる<sup>9)</sup>。

さて小作問題と石黒の関わりである。一九二〇（大正九）年、小作調査委員会が設置され委員会の実質的な人選は石黒が行ったという〔小平一九六二年 三〇頁〕。農政課の中に小作分室を設けてこの委員会の事務局をここに据えた。ちなみに小平権一が分室長となり、石黒を中心とした農政課の中で小作問題の調査、研究の拠点をここに置いたのである<sup>10)</sup>。

小作慣行調査は全国的に行われたものであり、地主小作間の争議に関わるあらゆる事例、実態が集約されたものである。これに基づいて一九二四（大正一三）年、農商務省所管で小作調停法が成立した。この法律の目的は、小作争議は裁判官の調停に持ち込む仕組みを確立させること、そして裁判官には各所で見られる小作事情含む労働関係の慣行を熟知してもらうよう調整する仕組みを作るところにあった。裁判官への連絡と調整を行う立場の小作官の制定を行った。

小作慣行調査により詳細な事例を集約し、それに基づいたそれぞれの

地域における小作慣行の諸事情を踏まえた解決のために小作官制度を確立させ運用していくことを考えたのである。

小作調停解決の仕組みを作った石黒はつづいて一九二七（昭和二）年五月に蚕糸局長に着任する。蚕糸局は、生糸の対外貿易拡張を図る目的で新設された部署であり、石黒は初代の局長ということになる。石黒の蚕糸局長としての業績について、小平が述べるには「農林省在職中で、もつとも顕著なものひとつ」とある〔小平 一九六二年 四三頁〕<sup>11)</sup>。蚕糸改良普及、繭価安定需給調節そして対外貿易としての産業活性化に行政面で尽力した時期であり、石黒農政の柱のひとつに挙げられよう。

そして一九二九（昭和四）年農務局長に、そして一九三一（昭和六）年農林次官に昇任する。折しもこの時期世界恐慌が起こり、全国的な農村不況が本格化する時代である。一九三二年（昭和七）年、石黒は省内に経済更生部を設置し、この年より農山漁村経済更生運動が始まるのである<sup>12)</sup>。石黒次官と小平経済更生部長による施策の始まりである。

そして一九三四年（昭和九）年七月農林省事務次官を退職し、十二月に外郭団体である社団法人農村更生協会が設立、翌年会長につくのである。そのとき石黒は五〇歳である。これより官僚としてはないが、官に影響を与える存在として一九三〇年代から四〇年代の農業施策および満州移出の施策に関わっていくのである。

もうひとつ、石黒が官僚時代に残した大きな仕事で、戦時体制下において満州への移出と大きく関わる日本国民高等学校の設立があげられる。日本国民高等学校の設立は、郷土会でも活動をとみにしている那須皓が訳した『北欧の農民文明と国民高等学校』が大きな影響を与えている。この本の重要な柱は、農村の中堅人物の養成であり、そのための農民の師弟教育を行う教育機関の姿を示しているところにある。デンマークの農民師弟教育のあり方が農民の中堅人物の養成に関わる教育機関であるという発想につながったわけである。その中で山形の自治講習所の

所長を務めていた加藤莞治が初代の学校長に、石黒は理事長についている。一九二六（大正一五）年の設立認可そして一九二七（昭和二）年の開設である。所在地は現在の茨城県笠間市（旧友部町）である。

「農村の中堅人物の養成」という点では、中農を養成する必要性を説いた柳田が一九〇〇年代に想起した考えと交差する見方もできる。もともと柳田の考えた「中農」はある程度経営面積を持ち自立した経営ができる自作農を想定しての「中農」であり、この文脈における「農村の中堅人物」とは考え方が重なるとはいえ全く同じであるとはいえない。<sup>(13)</sup>しかしながら初志としては自立性のある農民が農村から育ち、農家、農民自身によって自立的に経営基盤の確立をすべきであるという方向性は、柳田の示す中農とほぼ同じであろう。もともと、この自立した農民という発想は、のちに満州へ移出し開拓を奨励する政策と結びついていく土台となっていることもこの学校の存在と大きく関わりを持つこととなる。大正から昭和にかかる一九二〇年代後半における日本高等学校の設立は、まさに満州移出のための施策と大きくつながっていくのである。このうち全国各府県に農民道場（あるいは青年道場）が作られ中堅人物養成の教育機関が増えていく。その中で日本国民高等学校出身者が各所で指導者になっていったことも、戦時体制下にある農村のあり方や農民教育のあり方が国家の政策にも強く連結していったことも自明ではあるが確認しておきたい。

#### d. 戦時体制下への突入

石黒は農政官僚を辞して農村更生協会会長についた一九三五（昭和一〇）年一二月には、農山漁村経済更生運動は四年度目に突入していた。戦時体制下において石黒は一九四〇（昭和一五）年七月に近衛文麿内閣のもとで農林大臣になり翌年六月内閣改組までの任についている。太平洋戦争に突入する直前である。また一九四三（昭和一八）年には貴族

院議員に勅撰されている。一九三〇年代後半から一九四〇年代後半までの間、石黒は政治家としての経歴で活動することになる。ここではこの時期における社団法人農村更生協会会長における農山漁村経済更生運動での活動および財団法人満州移住協合理事長としての活動を中心に整理しておきたい。

農村更生協会における石黒の活動理念は、更生計画を立てそれを推し進めることができる村の自立性を高めること、そしてそれを推し進められる先導的人物の養成にほかならない。前者においては模範的な更生計画を立てられる村を選定し補助金が出るように調整すること、より自立的な経営ができるような指導——例えば農家簿記の奨励——を行う人材を派遣することがあげられよう。後者においては更生計画に忠実に実行できる立派な農民を育てるところにある。前者では模範村とされる事例を紹介し、より更生の具体的方法を知らせる活動を行っている。例えば一九三五（昭和一〇）年一〇月、ここまでの経済更生運動のなかで更生指定村として成功をしたとされる一九カ村の村長を集めて座談会を行っている。<sup>(14)</sup>産業組合中央金庫講堂で行われた座談会では石黒自身が司会を務め、参加者によって成功例が話されている。この座談会と同時に講堂内では数々の更生指定村での概況と更生計画の実践例が展示されるイベントが行われている。模範的事例の蓄積と紹介という見方もできるが、座談会の内容を見ると、各村が具体的に更生計画を実行したことについて語られるよりも、更生計画の全村への具体的周知徹底のさせ方や全村が一体となって更生計画に取り組む方法を語る場面が非常に多い。実務的なことよりも計画に携わり実行するための各農家、農民の精神的な側面をこの座談会では展開されているのである。

さて、この経済更生運動の中で早川孝太郎との接点も重要な意味を持っている。早川は一九三六（昭和一一）年五月に農村更生協会の囑託に、そして二年後の一九三八（昭和一二）年に主査となり協会の業務におけ

る中核的な役割を果たすことになる。<sup>(15)</sup> 早川が経済更生運動に関わったこの時期は、五年の更生村更生計画による実践の蓄積を経たのちといえる。先述した座談会でも計画の具体的施策もさることながら、むしろどのように村が一体となれたかという心構え的なことがまずは重要視されていたと感じられる。筆者が昭和七年度も茨城県各農山漁村の更生計画書を検討した中で感じたことを例にすると、経済更生運動初年度の前年より茨城県は農事集団指定地として指定した村に対して隣保共助を基盤とした栽培指導や共同販売確立を目指していた。経済更生初年度の実施に当たり、この県で行っていた事業が良好であったことから引き続きこれらの農事集団指定地のある村を中心に更生指定村の選定を行っている（和田 二〇〇八年 七六―七七頁）。ここから考えられるのは、まずは更生村の成功例を増やしていきながら農村の構造上のあるべき姿――例えば隣保共助による農村による活動の一体化――を作り上げていくところに、経済更生計画初期の目標をまずは定めていたように思われるのである。早川が経済更生運動に関わった時期は、そういった初期五六年の蓄積の上にある、より具体的な農民教育の活動へと接続していくものであったと考えられる。早川が関わったのは経済更生運動の初期ではなく、満州移民政策がより本格化する文脈の中で経済更生運動五年目以降にかかわったことに留意する必要があるのではないかと筆者は考えている。<sup>(16)</sup>

早川と経済更生運動の関わりで石黒との接点を整理すると、以下の三点に整理できよう。ひとつは朝鮮半島そして中国への食糧調査、ふたつには満蒙開拓青少年義勇軍の教育指導、そしてみつづめに簿記記帳運動における指導で全国の農村を回ったことがあげられる。<sup>(17)</sup> 須藤功によってこの時期の早川の活動が丁寧に整理されているので、それに基づきながらこの時期の活動と石黒との関わりをもう少し述べておきたい（須藤編 二〇〇三年 四三五―四八二頁）。

石黒は満州移民を促進することにより、農村の疲弊を解消する施策と

考えていたことは明らかであるが、それを実践し進めていく活動の中で早川の役割は大きかった。それは農民教育と指導という立場で、民族意識を想起しながら開拓で大陸に出る農民の精神的支柱を作るといふ面と、経営に農家としての自立性をもたせるための簿記記帳指導による合理的基盤を作るといふ面があげられる。いずれにしても石黒と早川の出会いはいは更生協会を通じて始まり、そして敗戦とともに満州移民施策は否定的評価を受けることになるが、早川は、戦時体制下における石黒の農政観を実践的な活動で支えた人物であり、また石黒が参議院議員として活動する中で協力者として陰になって支えをすることとなるのである。

少し横道にそれたが、もう一度経済更生運動における石黒の施策に戻りたい。

この経済更生運動で石黒が精神的支柱として掲げたのが「農民精神の作興」である。その教育の基盤となる場として一九三八（昭和一三）年長野県に八ヶ岳修練農場が作られた。ここでいわゆる農民精神の作興をめざした教育ができあがりやがて全国に「村の家」が作られていく。これらの教育機関が全国的な運動体として形成され、ひいては積極的に満州移出による開拓農民の養成へと連結したことは紛れもない事実である。石黒の説いた「真によき農民」の養成は、大陸を支配することと連結していたのか？ここではその功罪について触れることは抑止しておくこととして、少なくとも石黒の設立した教育機関は、自立した農民像を具現化させようとした組織であったこと、そして更生計画案を提出する各村が必ず記載した「農民精神の作興」ということが、一般の農村の中に普通に浸透していったことは間違いないようである。

それだけ一九四〇年代にさしかかるこの時期、経済更生運動も何年かの事例蓄積を積み重ねた上で、一九三七（昭和一二）年より本格的に始まった政府による満州移民政策の中に組み込まれる流れへと進んでいく



のである。

ちなみにこの八ヶ岳伝習農場において、石黒は今和次郎<sup>(18)</sup>との接点があったことを小平が記している。八ヶ岳に農場ができたのち「八ヶ岳の道場はいいよ、あそこにも家ができるから、一緒に行こうよ」と誘われた<sup>(19)</sup>という(小平 一九六二年 七二頁)。今は一九二〇(大正九)年早稲田大学教授として教鞭に立つが、それ以前にも柳田との民俗調査への同行そして一九二二(大正一一)年朝鮮総督府委嘱による民俗調査に関わっている。一九二〇年代における今と柳田そして戦時体制下における石黒と今との接点は大変興味深い。先述した石黒と早川との接点もこの時期であり、早川もまた八ヶ岳伝習農場で教鞭も執っている。農民教育の中心的な拠点となる八ヶ岳伝習農場そして生活習俗としての「野の知識」に大きく関わった今や早川との接点は、この時期農林大臣、貴族院議員そして農商大臣と歴任する公的な立場と密接に関わりながら、石黒の農村におけるフィールド活動に生かされたものといえよう。

#### e. 終戦から戦後期(公職追放から解除そして国会議員へ)

石黒は終戦後公職追放されるが、終戦を迎える直前、一九四五(昭和二〇)年四月鈴木貫太郎首相の下農商大臣に就任している。以後八月一五日の終戦のち同月一七日に東久邇宮稔彦内閣組閣までつとめる。戦争終了時の農商大臣である。この時期の最大の懸案業務は、食糧増産に関する施策である。当初大臣を引き受けることには逡巡したようであるが、小平によると石黒は鈴木貫太郎に対して「この内閣は、戦争をやめるための内閣でしょう」と念を押したが、鈴木からの回答は得られなかったという(小平 一九六二年 一三五頁)。また大臣受諾を答える際に鈴木に対して「私を農商大臣になさる理由は、軍が戦争に負けて引き下がるというのじゃなくて、日本が食糧のために、戦争を止めざるをえないのだ」という、戦争の責任を食糧の責任にもつていこうということでしょう。

それならば農商大臣を引き受けてもよろしい。それでなければ、私が農商大臣になる必要はありません」と記されている。石黒が農商大臣を引き受けたことについて、小平は「悲痛な決心」と指摘している。その見方がやや思い入れの強い評価のように思われるが、少なくとも食糧増産に関わる施策に長く関わってきた中で戦争状態に突入した一九三〇年代から四〇年代の流れを見ると、石黒自身戦争の幕引きにはふさわしい農業施策の責任者であったことはいうまでもない。長く食糧行政や農村更生に関わってきた石黒としては戦争の終結と自身の行ってきた施策が大きく関わりながら立ち会うべき立場を感じていたとは推察できる<sup>(19)</sup>。

終戦の二日前に石黒は農商省の幹部職員を集めて終戦後の農政について説明し、食糧の確保、多数の失業軍人や帰還者の就業問題などについて至急対策を立てるように指示している(小平 一九六二年 一五五頁)。食糧の国家管理制度の維持も敗戦後もゆるめることなく強化するように指示している。敗戦後の八月一九日に内閣は総辞職し、千石與太郎が農商大臣になる。石黒の指示した緊急対策の指示をもとに新大臣はさっそく戦後の農業、食糧の復興対策に取り組むのである。終戦のち、一九四六(昭和二一)年八月から五年間、石黒は公職追放となる。

前後するが同年一月、早川孝太郎が農村更生協会を辞職する。農村更生、食糧増産そして満州への移民政策で一九三八(昭和一三)年からの約七年強の期間を石黒とともにした早川は、戦時体制下の農政との関わりから退くことになるのである。しかしながら、石黒と早川のつながりは戦後も続き、九学会連合による対馬を対象とした学術総合調査(一九五〇～五一(昭和二五～二六)年)のち翌年、ふたりは対馬を訪問している。須藤功による指摘では、調査団長でもあり洪沢敬三と調査にあたった宮本常一が離島振興の必要性を感じ、そのためには国会議員の力が必要であるとして、対馬への視察を願ったという<sup>(21)</sup>。

石黒は公職追放解除後、静岡県地方選出参議院議員補欠選挙に当選し、

以後改選も含めてなくなるまで参議院議員を務めることになる。その間、全国農業会議所理事、全国農業協同組合中央会理事などの要職も兼ねる。戦後農政の中でも何かしら要職につきつづけた。そして一九六〇（昭和三五）年、農業基本法が公布される年に、七六歳の生涯を閉じるのである。

### （三）石黒の官僚としての業績と民俗学の交差

ここまで石黒の生涯について概観しながら、その業績を記した。石黒は農政官僚、農林大臣、農商大臣そして戦後は参議院議員と要職を歴任し生涯公的な立場で農政に関わった人物である。そのなかで特に壮年期までの官僚時代に施策を立てた業績は、日本近代農政史の中でも大きな位置を占める。整理してみると以下のように箇条書きができればよい。

○肥料問題（農商務省入省後から退官まで。不正肥料業者の取り締まり。）

○小作争議解決（小作課長時代に行った小作慣行調査。各所の実情にあわせた争議解決のため「小作官」を設置）

○蚕糸振興策（蚕糸局長時代）

○米価の価格統制（米穀法、食糧管理法の策定。米価統制論者という見られかたも成り立つ。）

○各種農業経営調査の開発（経済更生運動の基礎資料、そして農業基本調査の骨格を作る。）

このなかで農村という場における慣行や状況を直に把握することで解決していこうとするものとして、小作官の設置と各種農業経営調査の開発があげられよう。

小作争議解決に関わる小作官は、小作慣行にあわせた判断ができるように設置されたものである。小作慣行を全国的に調査した資料や土地を巡る由緒や集落における慣行など含めて、争議解決における法的解釈と個別に判断の補助線を引く意図が感じられる。このあたりは農村という場に基づいた施策を立てようとするものであろう。

また各種農業経営調査の方法を確立させたことは、のちに農山漁村経済更生運動における施策を立てる基礎資料となるものでもあり、また農業基本調査は、公的な立場にある国家が農村という場の数量的な実情把握をする基礎を築いたものでもあろう。

これらの公的な施策と農村という場をつないだ石黒の業績に、当時の民俗学周辺とどのような接合をもっていたのかについて、石黒の若年期における郷土会および柳田との接点を次節では検討したい。

## ②郷土会と石黒の関わり

### （一）郷土会の精励なるメンバー

郷土会における石黒の活動はどのようなものであったか。柳田國男の『故郷七十年拾遺』によると、柳田自身土曜会と郷土会の両方を開いていたが、新渡戸稲造より「同じような会をやっているから一緒にやらなにか」という勧誘を受け、「一人二人をのぞいて全部の会員が先方へ合流」したという。その橋渡しをしたのが新渡戸と柳田の両方の会合に出席していた石黒忠篤であったと思う、と柳田は述懐している（柳田 一九七一年 四六四頁）。

石黒が農商務属に任官したのが二四歳の時で、そののち『郷土会記録』に残っている発表、活動などの足跡から見ると三〇歳に欧州留学し帰国した直後まで参加しているようである。二〇歳代後半でありかつ任官間もない時期に郷土会でさまざまな刺激を受けたことが推測される。

石黒の郷土会での活動について、牧田茂による整理もあわせて参照しながら述べてみたい（牧田 一九九八年 四四〇―四四六頁）。柳田編による『郷土会記録』の序に記されている「精励なる会員」としてあげられているのが小野武夫、那須浩、草野俊介、木村修三であり、農政学、



農業経済学系の研究者・実務家である。彼らは石黒とともに熱心に参加していたようである〔柳田 一九二五年 三頁〕。

このときの定例会員以外にも折口信夫、鳥居龍蔵、今和次郎、高木敏雄、中山太郎なども参加しており、民俗学周辺に軸足を置く幅広い領域にわたる人々による交流の場でもあったことがうかがえる。そのなかで石黒は任官後すぐに関わってきた肥料問題、米価問題そしてのちに関わる小作問題といった農政に関わる施策に何かしらの影響を与えているであろう。

では石黒の郷土会での活動はどのようなものであったのかについて、柳田の記した『郷土会記録』（一九二五年）より読み取っていきたい。『郷土会記録』は牧田の指摘に基づく郷土会の第一四回の記事（一九二二（大正元）年一月二九日）から第三九回（一九一六（大正五）年四月八日）までのものであり、刊行は一九二五（大正一四）年である。郷土会が行われていたこの時期に、柳田は平行して雑誌『郷土研究』の刊行を取り仕切っている。雑誌の創刊は一九一三（大正二）年であり、毎号巻末に「雑報」の頁を用意し、そこで郷土会例会の報告がされている。号により記名がないものもあるが、おそらくすべて柳田によって書かれたものである。例会の内容により記載された報告文章も発表者と題目にふれる程度の記録から、それなりに長い文章で例会報告がされているものもある。石黒について触れた雑報は柳田にとって各回印象の強いものであったようでもともと文章が長い。この内容については後述したい。ここでは『郷土会記録』に記載されている石黒についての箇所と雑誌『郷土研究』でふれた石黒の箇所をテキストとして扱いたい。

さて石黒は一九一四（大正三）年六月に休職のち渡欧留学している。一九一二―一四年および帰国後の郷土会での活動内容はこの二点のテキストから読み取れる。『郷土会記録』は柳田による発表者の報告をまとめた詳細な速記録の要素が強い。<sup>(22)</sup>

では柳田の書いた『郷土会記録』に見られる石黒の活動はどのようなものであったのかについて整理しておきたい。なお出典は石黒の『農政落葉籠』収録のものから引用する。

石黒の郷土会での活動および作業は以下の六点が挙げられる。まず例会での報告である「豊後の由布村」「湯坪村の火焼輪知」「鹿島の先の新田」である。これら三つは石黒による取材旅行からの話題提供、報告のようである。『農政落葉籠』に収録されている「豊後の由布村」には（大、1・11）、「湯坪村の火焼輪知」には（大、1・11頃）と文章の末に記載されている。また『郷土会記録』に収録されている「豊後の由布村」には冒頭に「石黒忠篤君、大正元年十一月頃」とあり、「湯坪村の火焼輪知」には「（同上）」と記されている。雑誌『郷土研究』には「豊後の由布村」は一九一三（大正二）年発行のものに、「湯坪村の火焼輪知」は一九一四（大正三）年一月発行のものに収録されている。石黒が大正一年一月に例会でつづけて報告をしたかまでは確定しがたいが、内容については石黒の報告内容を柳田が取りまとめた文章であろうことは推測される。また若干であるが柳田が『郷土会記録』を編集した時に、雑誌『郷土研究』に収録されていた報告に、てにをはレベルの手直しはされているが、内容そのものの大きな改訂はされていない。

『農政落葉籠』収録の「鹿島の先の新田」の文章末には（大、二）とある。これは『郷土会記録』にも収録されており、柳田の追記で「記録に逸して居るが、たしかに聴いて筆記した晩を記憶する。多分は大正元年中のことであって」（柳田 一九二五年 七七頁）とあり、これら三つの報告がどの順序でされたかまでは定かではないようである。しかしこの報告は、雑誌『郷土研究』には大正三年七月発行号に掲載されている。

いずれにしても以上の三報告は石黒の報告を柳田が取りまとめた文章と考えられる。

この三報告のちに行われた第一五回例会（一九一三（大正二）年三

月三日)<sup>(23)</sup>に「農家の構造について」というお題で報告を行っている。新渡戸稲造宅で行われた会で報告内容の詳細はないのであるが、『郷土会記録』にある「郷土会第十五回記事」の中で柳田が書き記している。この例会も柳田にとっては「興味の誠に多い話」(柳田一九二五年 六頁)であったようである。石黒は全国各地の農家の構造もすべて同じような作りであるのではなく、屋根の形、破風の有無、屋棟の方向な実に千変万化であることや、明瞭に地方によって違うものから狭い一谷の近隣でもいろいろの屋根があるなど、多くの資料を調査吟味しないといけないなど各地の研究者と永い共同が必要であることなどを説いたようである(柳田 一九二五 七頁)。柳田にとってかなり刺戟のある報告であったことが伺える。

また第三七回例会(一九一五(大正四)年二月二日)<sup>(24)</sup>では報告当番に不都合があり、話題提供がされなかった会で、そこで出席者によって短い話をしたようである。このとき石黒は「地方生活の比較研究の必要なることを鎌の大小と用法それから砥石の種類などの新しい事を話された」とある。こちらも記録は雑誌『郷土研究』雑報の中でふれられている。ちなみに石黒が欧州留学から帰国後の短い報告である。雑報では郷土会例会報告は必ず掲載され数行から多くて一ページは割かれるが、第三七回例会に関しては二ページ近くにわたって書かれてあり、柳田にとっては石黒の報告も含めて大変刺戟のある会であったことがうかがえる。<sup>(25)</sup>

誌上に残された報告に関しては以上五つである。その他には郷土会で企画した神奈川県津久井郡内郷村の調査における村落調査様式の項目作成に関わっている。石黒は小平権一とともに「農業その他の生業」を受け持っている。ただし石黒は一九一八(大正七)年八月の内郷村調査には直接参加していない。この年石黒は病氣休職から復職のち五月に農務局副業課長に着任している。農政の中心に関わる初めての課長職であ

り、また米騒動が勃発し農業を巡る環境が大きく変わる結節点の年である。現地調査に直接関わらなかった子細は想像の域ではあるが、公務が多忙になってきたことと関わるのではなからうか。

直接の調査には参加していないが、翌月九月二一日に行われた例会において内郷村調査の報告会が行われており、その例会に石黒は出席している。内郷村調査の結果に関しては新渡戸、柳田とともに聞く機会があったようである。

この年の二月一日は例会が石黒の自宅で開催され、牧田の整理によると「英国の田舎のことが話題になった」(牧田 一九九八年 四四八頁)とある。

柳田は、郷土会の例会は一九一九(大正八)末まではつづいていたはず、と『郷土会記録』の緒言で記している(柳田 一九二五年 一頁)。郷土会の活動は新渡戸が一九一九(大正八年)三月に欧米視察に出かけ、そののち柳田によると新渡戸稲造宅の「向かい側の田中阿歌磨さんの家で続けることにしたら、ぱたと人が来なくなって駄目になった」ようである。そのものが消失していったようである。同年柳田も貴族院書記官を辞めジュネーブに行くこととなり、中心人物はいなくなったことに加えて、先に述べたように石黒は農政の中心的役割を果たす第一歩を踏み出した時期でもある。同じ年、石黒は農政課長に着任し、公的な立場で米価調節などにも関わっていくのである。

## (二)「豊後の由布村」「湯坪村と火焼輪知」「鹿島の先の新田」に見る

### 石黒の視点

石黒の郷土会活動の中で発表内容がまとまった文章で残っているのが「豊後の由布村」「湯坪村の火焼輪知」「鹿島の先の新田」である。もちろん先述したように柳田による最終的なまとめではあるが、ここではこれらの報告の中に見られる石黒の観察眼を検討したい。なお『郷土

会記録』には石黒の各報告に対象とした地域の地図が載せられている。どの図を見ても取材した地域についての立地がよくわかるものである。柳田が『郷土会記録』を編集するときに収録したものかと思われるが、石黒が例会で資料として使ったものかもしれない。『農政落葉籠』はこの『郷土会記録』を下敷きに収録されているが、この地図は掲載されていない。以下の三報告で筆者が引用を『郷土会記録』からとることも考えたが、石黒も最終的には確認していると思われる『農政落葉籠』収録の方に依拠することとした。

#### a. 「豊後の由布村」

「豊後の由布村」は大分県速見郡内を対象とした、いわゆる由布院に関する報告である。石黒は「北由布村大字川上に宿して、夜分村老と会談し色々昔の話を聞いた」(石黒 一九五六年 一一九頁)と記しており、由布周辺を踏査した折、老人より村の古くからの話を聞き取りした内容が中心である。

冒頭で由布の地名のいわれについて記しており、由布が「南由布」「北由布」の二村に分かれ、そして両者とも各々三つの大字とその大字の中にも多くの組が集合している重層的な村組織のあり方を説明している。由布は「純然たる旧一村では無い」(石黒 一九五六年 一一九頁)と報告をしているところから、村組織のあり方について細かく観察していることが伺える。

また、村老から由布というムラの口碑に関わることも聞き取っている。由布村の起源、特に地名の起源についての語りが記されている。例えば、由布にある南乙丸、北乙丸というふたつの字のいわれについて「景行天皇巡狩の遺跡で、今の地名は即ちオトマリの転訛である」(石黒 一九五六年 一一九頁)と説明している。また村の発祥に関わる伝承についてもふれている。「川上の地に馬場千軒という部落があったが牛鬼馬鬼が

出てきて由布嶽の一角を崩し村を壊してしまった」(石黒 一九五六年 一二〇頁)とする口碑を紹介したあとで「たぶん火山爆発の古伝であろう」と説明している。口碑をいったん受け入れる石黒の考察は、非科学的な何かと最初から捉えず、口碑に対する一定の解釈と評価をしたものといえる。

そして狩猟に関しての禁忌にも触れている。狩猟で生計を立てていた由布嶽近辺での禁忌である。例えば近世において由布にある東畑に住む猟の名人といわれた者が「二人で行けば山の神に崇られる」という言い伝えがあるにもかかわらず、由布に近隣する鶴見嶽へ近隣の田野(球磨郡)に住む猟師と二人で出かけ鹿の寝待ちをしていると山が荒れて眠れなかったという。

また田野の猟師から家伝来の山刀を東畑に住むある猟師に与えられ、それを携えていくと人でも化け物でもないものに山刀を飴のようにペロペロなものにされたなどといったところから、鶴見嶽には猟師は行かないという。このように山の禁忌に関わる口碑を詳しく報告している(石黒 一九五六年 一二〇―一二二頁)。

また由布村の山林における入会関係についても詳細に述べている。報告では著しく複雑であり紛争が多かったという。由布村以外の地に入会の山を持つ分だけでも九か村まであるという。このことについて由布村が「全く一村が多くの領主に分給せられて居た為であるらしい」(石黒 一九五六年 一二三頁)と述べている。一村の中で天領と延岡藩、森藩が複雑に領有していたことを報告している。入会紛争の理由を村支配の歴史と仕組みについて詳細に聞き取っている点は、のちに石黒が農政課長時に組織し実践する小作慣行調査の理念と通じるものがある。土地に関わる取り決めや慣行および歴史的な背景とその地域の諸事情をおさえようとする姿勢は、この報告からも読み取ることができるのである。



## b. 「湯坪村の火焼輪知」

この報告は熊本県、大分県の境界不明箇所にある原野と山林の論地についてのものである。土地所有に対しての地元での慣行及び歴史的由来が、所有紛争においては重要な要素となっていることを伺える報告でもある。

豊後国玖珠郡飯田村湯坪（大分県側）および肥後国阿蘇南小国（熊本県側）の間の境界不明箇所である二筆の土地について、湯坪側は字「甚五郎」「腐湯」と呼び、かたや南小国側は「火焼輪知」と呼び、昔より争いのあるところであったという。湯坪側は江戸期には幕府の御料地であったので優勢であったが、明治期に入り一八七四（明治七）年の改組の際、「民有地」として登簿した。しかし南小国では「官有林」として登簿していたことがその後二五年を経て明らかになり、台帳上所有権が重複し曖昧になっていることが発覚したのである。一九〇六（明治三九）年頃に官有地払い下げと同時に境界論所属論が再び勃興してしまうが、両県知事の交渉で県界の確定と土地所有権の確認をとめ、翌年に道路に沿って県界が定められることとなり、土地は熊本県になった。しかしあくまでも県界の確定を行っただけで、土地所有権の確定が解決したわけではない。もとより所有意識を持っており、かつ民有地として登簿していた湯坪側は、山に入り草木をとっており、そのことで官有地として管理していた林区署と争議をよく起こしていたようである。のちに民有地と認めた林区署もこの場所を別の林地に換地することを湯坪側に打診したが、応じなかったという。

何度かの打診にも首を縦に振らない湯坪に業を煮やし、林区署側は草刈りなどの収益について一切禁じる状態に至った。また税務署は使用できないこの二筆に関しても登簿してある以上地租を取り立てることを辞めない。

最終的にはこの二筆に関しては飯田村有を勧奨する行政単位での部落

有財産統一により、飯田村有として解決を成し遂げたのである。

概要を整理してみたが、歴史的な所有意識、共有地としての資源活用の慣行などを踏まえた報告といえる。また何故にこの場所を湯坪側が簡単に換地することを認めなかったについても石黒は「櫟の自然純林で、相当な間隔を保って大木が生い茂り、その間は胸に達する程の草立」であり「田原川の一源流が出て居るのであるから水源涵養にも固より肝要」〔石黒 一九五六年 一二六頁〕と述べている。この地を踏査した時に現場を歩いて観察してその背景を考察していることが伺える。

また「火焼輪知」の名称についてその言われについても言及している。「季節になると大挙して山に入り、草を結んでほほじろの巢の様なものを掛け、数日乃至十数日それに起臥して専念草刈に従事し、十分に乾草を作って下山し、爾後漸次に搬び来る風」があることを紹介し「乾草積み置き場に対して、野火の延焼を防ぐ為に毎年春彼岸前後に其の周囲を焼き切る旧慣」がありそのことを「輪地切」と称していると紹介している〔石黒 一九五六年 一二七頁〕<sup>(26)</sup>。

「豊後の由布村」「湯坪村の火焼輪知」については石黒が九州を踏査した時のものである。この報告に関しては『故郷七〇年拾遺』の中で柳田は「大正初期に日本の経済事情を調査した時など、今は政治家になっている石黒君が九州を歩いて来た態度が実にいいので感心した。（中略）今の九重高原を縦横に歩いたもので、一寸他人の気のつかないことを沢山喋ってくれた。四十何年前の立派な報告である」〔柳田 一九七一年 四六五頁〕と高く評価している。

柳田は『時代ト農政』においても「本来「村の土地は村で利用する」という思想は歴史上の根柢を持つている思想でありまして、今日の社会となりまして暗々裡に村が大きな勢力を持っております」〔柳田 一九一〇年 ただし本稿は一九九一年 二三頁〕と述べているが、村の土地のあり方が複雑に入り組んでいることが伺える石黒の報告は、当時の

郷土会例会において柳田の農村観に響くものであったと思われるのである。

### c.「鹿島の崎の新田」

この報告は、茨城県鹿島（現鹿嶋市）若松村にある三つの大字についての報告である。三つの大字にはいずれも名称に「新田」という名称がついており、大田新田、須田新田、柳川新田と呼ばれている。柳田が『郷土会記録』を編集するときに「たぶん大正元年中のことで、従って此の旅見の見聞は、同じ年の初め頃と考へる」と記している。

石黒は三つの大字の地勢的特徴、生業そして口碑について聞き取りしたことを述べている。それぞれの新田に関わる報告の中で特徴的なものを記したい。

石黒は大田新田は地割の様式に着目している。「間口が小さいので四十間、普通は七十間、まれに八十間のものもある。奥行きは多くは四百間」とかなり広い取り方をしていることを指摘した上で「人家は其の路の東側に川に向かって建てられ、後年に入り込んだ家ばかりが稀に川を背にして路の西側にある」と述べている〔石黒 一九五六年 一二九—一三〇頁〕。かつての川沿いの往還を中心とした家の立地について観察しており、利根川沿いの河川交通と集落立地について観察している。

須田新田については「八丈島の島民を連れてきて開かせた」という口碑を紹介し、「文久二年に八丈島から移住者を招いた記録があるから恐らくは事実であろう」とし、口碑と文書記録の照合について述べている〔石黒 一九五六年 一三〇頁〕。

柳川新田については報告文章も長く、石黒が例会で話した中ではそれなりの時間を割いて報告をしたことが伺える。柳川新田を開いた柳沢惣左衛門という人物についての開発伝承、米や落花生の生産状況や評価、そして出稼ぎがないことなどを記している。ほとんどが柳川氏所有の土

地を耕作する小作人たちの分家を奨励し、隣村の山林を買い入れて貸し造林と開発をしながら、その分家した家々が開発した場所を小作地として支えているのである。住んでいる人々の定着率の良く、小作料率の安さを指摘している。「隣村に比べると十分の三乃至四」であることや「燃料は何れも地親の持山に入って取り、柳川氏自身は却って之を買って使う」などにより「生活が楽である上に徴収が寛なる故、村の者帰服し、珍しく感じのよい村になって居る」としている〔石黒 一九五六年 三一—三三頁〕。

小作慣行のあり方と村柄の良さに言及する報告であり、石黒がこの地を訪れたときの観察が非常に幅広く、旧習と現状把握そして口碑と文書記録について幅広い考察をしていることが伺えるのである。

### ③まとめおよび今後の作業について

石黒の生涯の中で、官僚、政治家として行った施策と、彼の農村や農家に向き観察する視点が交差する結節点を見極める必要があると思われる。

そのためには郷土会での活動、日本国民高等学校の設立、農山漁村経済更生運動における石黒の視点を考えていく必要があるかと思われる。本稿では郷土会の活動報告から観察できる石黒の視点を述べ、検証しなければならぬ今後の課題を二つ提示することでまとめたい。

まず、明らかなのは、郷土会での報告にはのちに彼が行う小作慣行調査に対する問題意識にかなり接続していることが伺えるということである。石黒は、柳田が農政官僚の折より提案していた「小作金納制」や、地租が金納になっているにもかかわらず物納を行っていることを指摘し論争されている頃に農商務省に入省している。そしてこの問題の根もとには、近代的な農村であることを志向するとともに、旧習を基盤とせざ



るを得ない農村の現状にあると、石黒が見ていたことは明らかである。<sup>(27)</sup>

村の歴史的由来、慣行そして口碑に対しての観察眼ががかりな農業調査に結びついていることは想像に難くない。法律的な解釈ではなく、新しい問題をどうすくい上げるかについては、石黒は農村への取材調査で気づいたことを郷土会で披露し、「部類の調査好き」が見せる精細な視点で報告していたといえる。そしてまた柳田をうならせる報告をしていたことは間違いない。石黒と民俗学が関わっていたということではなく、民俗学的想像力と観察眼が農政を差配する立場である彼の若年期にはたしかに存在したということである。柳田の農政における挫折という評価のされ方もあるが、この問題意識は少なくとも郷土会を回路としながら、官僚、政治家石黒の立場で農政上の施策実践がなされたとする見方は可能であろう。

小作慣行調査を含めて大がかりに行われる米の生産費調査、農家経営調査に基づいた食糧管理制度の立ち上げも、近代化という中で工業化と同じ脈略で考えない旧習との関わりを実態として捉える意識が、石黒には根付いていたともいえる。石黒の施策への実践は、農村、農家に関わる調査と一体化していることは明らかである。石黒の若年期において郷土会は、将来を決める学びの場であったこととなり、またあらゆる民俗学研究を広げていく人々との交差がはじまった最初の間であったといえる。

もちろん石黒の農業施策は後年満州開拓移民の問題などで批判の対象となっていたが、少なくとも単純に食糧増産施策のみを考えた施策ではなく、農村農家の事情と向き合いながらの判断であったことは想像される。しかしながらこの時期の検証はのちの課題とさせていたいただきたい。

もう一点、今後の課題として、柳田の常民観と石黒の農民観の交差を考えなければならない。柳田の常民観と石黒の農民観について全くイコールではないが、重なっているところを見ていく必要がある。ここは

「日本国民高等学校」における「農民の中堅的人物」、農山漁村経済更生運動における「農民精神の作興」との関わりで改めて考察する必要がある。石黒が「常民」ということばを使った談話、文章は管見のところ見つけることはできなかったが、「中農」という概念については、出発点は違うがおおよその共通性は見出せる。

もともと石黒は、柳田の中農を養成する志向と違い、日本の農村に見られる現実的な側面より「小農」の活動を支える考えを持っており、協同組合などの活動をより奨励しようとする側面も見られる。柳田と石黒の施策や考え方は方向性が似ていながらもやはり違いもある。今後の検討作業として常民観、農民観の認識の交差<sup>(28)</sup>を検討したいと考えている。

## 註

(1) 庄司俊作は第一次世界大戦後の官僚機構による時流を察知しながらの経済的民主化を「上からすすめる」官僚集団の特徴としての確に整理している(庄司二〇〇三年 一〇八—一〇九頁)。社会主義運動、大正デモクラシー等の影響を受けた官僚集団による現代国家化(介入主義国家化)は当時の社会問題への対応として大きな役割を果たしたとされる。その中でも農政に関わる官僚集団が、この時期石黒忠篤、小平権一により小作問題に関わる施策集団として大きな役割を果たしていくのである。小作問題以降のちにつづく石黒の施策は、この介入主義国家化の中で捉えなおすことはできる。筆者はこれを「官僚による支配」という見方ではなく、当時の「学ぶ姿勢を心得た官僚による立案と実践」という視点からまず本稿は石黒の農業政策を考えていきたい。

(2) 例えば須藤功は『早川孝太郎著作集』の中で「石黒は文章を書くのが苦手であった。農村、農業についての依頼原稿、あるいは講演の草稿などをしばしば早川が執筆していたようである。」(須藤編 二〇〇三年 四八二頁)とある。また小平権一も「忠篤は、およそ文章の人ではなく、談論風発型である。自ら筆をとって、文章をものにしたことは少ない。……(中略)……文章嫌いの忠篤が残したものは、昭和三十一年の『農政落葉籠』ぐらいのもの」とある(小平 一九六二年 二八頁)。「農政落葉籠」もその時節で書いた断片的な文章か、あるいは談話が文字化したものであり、まとまった文章を残してはいないことはたしかである。ま

小平も『農政落葉籠』ぐらいと言及していても同じ著書の中で「大体、忠篤という人は、文章家とはいえない。……(中略)……『農政落葉籠』の文章も、忠篤が執筆したものは少なく、多くは、そのときの当事者たちが速記したもので、印刷になったものへ、忠篤が書き込んだものもある。」(小平 一九六二年 一八七頁)としていることから、忠篤が残したとする文章は談話になったものが多く、それを文字化されているものが多いと評価できる。

(3) 小平の解説によると「明治二代目の英国公使であったサー・アーネスト・サトウおよびチェンバレン博士の研究を継承して、日本史三巻の大著を完成した学者」とある(小平 一九六二年 二四頁)。

(4) なお本文に記したように初出は一九五五年一月。本文は一九五六年のものから引用した。

(5) 石黒が一九四三(昭和一八)年一月に貴族院議員に勅撰されているが、そのとき東郷の誘いで無所属倶楽部に入会している。東郷はのちに戦犯として収監され獄死するが、石黒とは生涯にわたって公私とも接点のある関係であったといえる。

(6) 石黒は昭和三〇年一月の「石黒忠篤後援会記録」の中で当時の肥料問題について「明治四一年に肥料取締規則を作った当時は「人造肥料」という言葉が広く使われていた時代でした。その当時肥料といえは過燐酸でした。その頃は肥料会社は肥料の中に砂やなんか、いろいろなものを混ぜて売ろうとする商人があった。私たちはこういうことは農民をだますことになるからやめさせなければいけないと考えていた。」と述懐している。なおこの記載は(石黒 一九五六年 二四頁)より引用している。

(7) 守田も石黒と同様入会関係の問題に取り組み、農業近代化論に対する考え方は工業的効率生産に疑念を持ち訴えてきた人物の一人である。例えば守田は「農業は農業である——近代化論の策略」において、農業生産の効率性、農産物の規格化を徹底させる工業的思想には疑念を持ち持論を展開している(例えば守田 一九七一年)。時代や立場は違うのであるが、石黒も守田も工業的発想に基づく農業には疑問をもち農業政策に関わってきた人物としての共通項を持ち合わせている。なお守田志郎の農業近代化論批判については拙稿(和田 二〇〇七年 一〇五—一二三頁)に取りまとめた。

(8) 室井康成は、遠野物語論を再検証するにあたってこのことを詳しく論じている。柳田が『遠野物語』再販にあたり「此の書を外国に在る人々に呈す」を献辞に書いた解説を詳細に論じている。室井の解説について述べると、柳田は当時洋行する人々(例えば石黒とした場合)へこの本を送った意味について「帰国後に職務として対峙しなければならない農業者の多くは前代的な価値意識に志向を拘束された人々であり、そのことを忘れずに調査・研究に励めという意図から送ったと見るのが妥当」(室井 二〇〇七年 一八頁)であると述べている。

(9) 一九一〇年代の米を中心とした食糧管理政策が石黒の大きな仕事であるが、石黒とともにこの問題に対して関わってきた人物ものちに一九三〇年代に満州を拠点とする施策に関わっている。那須浩、橋本伝左衛門、加藤完治などがあげられる。

(10) 小作分室の業務を小平の整理に基づいて示すと以下ようになる。「○各道府県警察部からの小作争議、農民組合などに関する報告による調査。○諸外国における土地制度に関する法令、小作慣行、その他これらに関係するすべての文献の翻訳。○国内における小作慣行調査。○農民組合活動の調査とりまとめ。○現地出張による調査。○委員会に提出する議案の協議。○その他参考資料の作成。」(小平 一九六二年 三二頁)。これらの業務を見てみると終わりのふたつに関しては委員会事務局としての業務であるが、他の業務を見ると限定的な研究組織の側面が強いといえる。小作分室が小作問題施策の実質的なシンクタンクに近い形で活動していたことがうかがわれる。のちに小作分室は小作課に格上げになり、石黒は小作課長に横滑りしている。通常農務局の筆頭課である農政課長から新設部署の課長に移ることは通常の役人の世界からすればこの人事は横滑りというより格下げに近いものがあると推測されるが、小平によると石黒が自ら人事を希望したという。

(11) 石黒はこの部署を経験してのちに日本中央蚕糸会特別議員、糸価安定委員会会長、蚕品種審査会会長などの要職に就いている。

(12) 石黒は、この計画の初手で、農業経営の改善において模範となる経営計画を具体的に設計し、それが十分適切な計画であるかを吟味する審査機関である経営改善審査委員会を作る。このとき審査委員会には各所で実績を上げ自作農として農業経営に明るい老農四名を加えていることは注目値する(小平 一九六二年 六五—六七頁)。

(13) 柳田の「中農養成策」を見る限り、中農の必要条件のひとつに田畑の経営規模をあげていることは明らかであり、また寄生地主に対してのアンチテーゼとして出された概念であることも重要であろう(柳田 一九〇四年、ただし引用は 一九九一年 五五四—五五五頁)。また山下紘一郎は柳田の中農観について論評しており、柳田の想起していたものは「手作地主(豪農 的中農)」という見方を示している(山下 一九九〇年 六〇頁)。その意味では、この段階における石黒や加藤たちが想起した中堅人物とは、柳田の提唱した「中農」と同じ方向性にあると見るにしても、自立した経営ができる農民個々人の養成とその教育のあり方から出発しているものであろう。双方の概念はかぶるが、そもそもの出発点とめざしているものは違うと、筆者は考えている。

(14) この様子については冊子になって刊行されている「農村更生協会編 一九三五年」。なおこのイベントは二宮尊徳八〇年祭とあわせて開催されたという。

(15) 石黒と早川の関わりは鈴木脩一（ペンネーム鈴木木三三）によると「この時期の早川さんが石黒農政のよき参謀であった。石黒先生の信任もあつかった」（鈴木一九七三年 三頁）と述べており、協会の活動においては農村の調査、指導に関わる中心的人物であった。

(16) 福田アジオは、一九二〇年代には柳田門下で民俗学の世界に入っていた早川が一九三〇年代を経過する中で農村における実践的活動を帯びながら農本主義者として登場したことに注目している。「民俗学者が実践的活動に関係し活動するとき、安易に農本主義的傾向を持つことは近年にもみられるが、早川の場合にはそれが典型的に現れたものといえよう」と指摘している（福田 一九七九年 二〇六頁）。福田の評価と指摘は十分了解できるものであるが、介入主義国家化がよりいっそう促進され、戦時体制下に入る一九三七年以降の農村更生協会の活動と関わらせて検証する作業は今後必要であろう。早川は村の慣習や規範が国家や民族のあり方につながる思想を農村更生協会の機関誌『村』でも連続的に文章を掲載しているが、早川の筆致がそのようになっていくのは一九三七年（昭和十二年二月号）にある「炬辺回顧」からである。このことについては（和田 二〇〇九年 二二八―二二九頁）に記したが、今後『村』で一連の文章を通時的に分析していくことで、早川の評価をより明らかにしていかなければならない、と筆者は考えている。

(17) この運動では指定された範例集落（二カ所の簿記帳指導に早川は回っている。範例集落とあるように、集落全体で全戸簿記帳をしたら、新規事業として産業組合からの融資が無利子で受けられるというものである。運動という名がついている自立的な活動のように見えるが、しかし公的な事業という側面も感じられる。農山漁村経済更生運動そのものが自立した民の運動という側面もありながらも公的な施策とも密接にリンクしているものといえよう。

(18) また今は石黒との出会いについて以下のように述べている。布団を押し入れに引きっぱなしで母と貸家で暮らしていたころ、石黒がひょっこりたずねてきて「うむ君の生活はなかなか面白い」とほめ「君ひとつ、農村を巡って農家を見て歩かんか。役所でなんとかしよう」といって「農商務省嘱託」という肩書きをもってらって農村を歩いたという。新渡戸先生と郷土会で最初に出会い、この頃は柳田先生と一緒に農村を歩いていたころだ、と今は述懐する。なおこの記述の引用は『石黒忠篤君後援会草書』パンフレット一九五五年 石黒忠篤君後援会に掲載されたものであるが、再録された「大竹編 一九八四年 四五頁」に依ってまとめた。

(19) もっとも、鈴木が戦争の幕引きの理由に食糧難をあげながら終戦にもつていくために、石黒に大臣就任を依頼したという小平の言及は、もう少し多角的に検証する必要があるかと思われる。食糧増産施策に腕をふるってくれるのではないか

と、鈴木が石黒に対して評価と期待をしたという見方もまた考えられる。いずれにしても石黒の内面としては戦争の終結を意識しながら農商大臣の任を受けたのは、ずれた推察ではないように筆者は考える。

(20) ちなみに石黒は二四歳のとき所帯を持つが、妻光子は渋沢栄一の孫である。したがって渋沢敬三とは遠いが親戚関係ということにもなる（須藤編 二〇〇三年 四四六頁）。

(21) （須藤 二〇〇三年 四七七頁）。このちに離島振興法が成立する。

(22) 柳田もこのことについて「とても全部筆記できないから、人の話の要点だけを書き留めて要領よくまとめるようにした」と記している（柳田一九七一年 四六五頁）。

(23) 『柳田國男事典』には三月二日と記載されているが、『郷土会記録』には「三月三日の晩」とある。どちらが正確かまでは吟味はしていないのであるが、ひとまず柳田の記載した方を本文では記載した。

(24) 開催年月日については検討の余地があるかもしれないが、以下のように記しておきたい。雑誌『郷土研究』第三卷第一号（一九二六（大正五）年二月発行）にある「雑報及批評」の中では「昨月十二日の晩」とある。この号の奥付は「二月二日印刷二月一日発行」なので、文字通りとれば「大正五年一月二日」になるだろう。柳田がのちに『郷土会記録』を編集した時に、おそらくこの雑報の記録を見てだと思われるがこの箇所を「二月十二日（大正五年）の晩」（柳田 一九二五年 一六六頁）と書き換えている。しかし牧田による整理では「二月一二日の設定で書かれている。判断の難しいところであるが、雑誌『郷土研究』の入稿や発行のことを考えると柳田が一月に雑報の執筆をしていたように思えるし、一月一二日開催の例会記録を二月一日刊行のものに出すのはかなり困難があるろう。ここでは柳田の書いた原本に忠実であるべきかもしれないが、牧田の整理に基づきたい。

(25) 『郷土研究』第三卷第一号（一九二六年）の雑報及批評に記されていることに基づく。

(26) なおこのことについてはのちに農村更生協会の雑誌『村』昭和十五年九月号のなかで石黒は「草刈について」という報告を残している。ここで輪地切りのことについて「このことを郷土会で報告したのを柳田國男さんが書き留めて『郷土会記録』に収めて居られる」と記している。（筆者が参照したのは（石黒 一九五六年 八一頁））

(27) たとえば石黒は石井英之助との対談で農政七〇年の回顧談を行っている（大竹編 一九八四年 四一―一六頁）。その中で石黒は、小作問題に関わった大正時代のことを取り上げた中で、柳田との関わりについてふれている。柳田の小作物納制や小作料の口約など合理性に欠ける農村の側面を指摘した講演についてであ



るが、これは柳田が一九〇七年愛知県農会で講演したもののちに『時代ト農政』に収録されていることは周知の事実である。この講演があったとき、石黒は入省する直前であり、また『時代ト農政』刊行の年に入省している。省での直接のつながりはないが、小作問題の解決方法の考察を通じて、両者の交差がはじまったことは明らかであろう。

(28) 大竹は石黒の考える自立した農民像と柳田の常民観が重なる点を指摘している(大竹 一九八四年 四九六頁)。重なることは了解できるにしても、そののち常民概念は民俗学の中で対象概念として規定されていく流れを踏み、石黒の農民像とは概念の捉え方として異相のものとなったかと思われるが、双方の概念がどのようにに交差するかについては今後検討課題としたい。

## 引用文献

- 石井英之助・石黒忠篤「対談農政七十年の思い出」(大竹啓介編『石黒忠篤の農政思想』農山漁村文化協会 一九八四年)
- 石黒 忠篤『農政落葉籠』岡書院 一九五六年
- 石黒 忠篤「豊後の由布村」(『郷土研究』第一巻第六号 一九一三年 郷土研究社)
- 石黒 忠篤「湯坪村と火焼輪地」(『郷土研究』第一巻第一号 一九一四年 郷土研究社)
- 石黒 忠篤「鹿島の崎の新田」(『郷土研究』第二巻第五号 一九一四年 郷土研究社)
- 石黒 忠篤先生追憶集刊行会編・発行『石黒忠篤先生追憶集』一九六二年
- 大竹 啓介「石黒忠篤の農政思想」農山漁村文化協会 一九八四年
- 楠木雅弘編著『農山漁村経済更生運動と小平権一』不二出版 一九八三年
- 小平 権一「石黒忠篤 一業一人伝」時事通信社 一九六二年
- 庄司 俊作「近現代日本の農村 農政の原点をさぐる」吉川弘文館二〇〇三年
- 鈴木 棠三「更生協会時代」(『早川孝太郎著作集』第七巻 月報四 一九七三年)農村更生協会編・発行
- 「村」昭和十五年正月号 一九四〇年
- 「村長は語る 農村更生座談会」一九三五年
- 牧田 茂「郷土会」(『野村純一、三浦佑之、宮田登、吉川祐子編『柳田國男事典』勉誠出版 一九九八年)
- 早川孝太郎(須藤功編『早川孝太郎全集』第一二巻 未来社 二〇〇三年)
- 福田アジオ「早川孝太郎」(植松明石、瀬川清子編『日本民俗学のエッセンス』ペリカン社 一九七九年)
- 室井 康成「『遠野物語』再論 ―柳田國男の『動機』をめぐる新たな読みの可能性―」(『京都民俗学会編『京都民俗』第二四号)二〇〇七年
- 守田 志郎「農業は農業である ―近代化論の策略」農山漁村文化協会 一九七一

- 年
- 柳田 國男「時代ト農政」(『柳田國男全集』二九巻 文庫版 筑摩書房 一九九一年(藤井隆至解説)) (初出は 一九一〇年 聚精堂)
- 柳田 國男「中農養成策」(『柳田國男全集』二九巻 文庫版 筑摩書房 一九九一年) (初出は 一九〇四年 『中央農事報』一(四月))
- 柳田 國男「故郷七十年拾遺」(『定本柳田國男集』別巻第三 筑摩書房 一九七一年) (初出は 一九五八年神戸新聞社連載、一九五九年 じぎく文庫より出版。)
- 柳田國男編『郷土会記録』大岡山書店 一九二五年
- 柳田 國男「雑報」(『郷土研究』第一巻第二号 郷土研究社 一九一三年)
- 柳田 國男「雑報及批評」(『郷土研究』第三巻第一号 郷土研究社 一九一六年)
- 山下紘一郎「柳田國男の皇室観」泉社 一九九〇年
- 和田 健「農家個別の判断と協業関係のあり方―守田志郎の農業近代化論批判から二〇〇七年新補償制度を考える」(千葉大学文学部・文学研究科編発行『人文研究』第三六号)二〇〇七年
- 和田 健「農山漁村経済更生運動初年度における生活改善事項と民俗的慣行との関わり ―昭和七年度茨城県指定村の事例より―」(茨城県立歴史館編・発行『茨城県史研究』第九二号)二〇〇八年
- 和田 健「『明文化・系統化される民俗 ―農山漁村経済更生運動初期における生活習俗の創造』(小池淳一編『民俗学的想像力』せりか書房) 二〇〇九年

(千葉大学国際教育センター、国立歴史民俗博物館共同研究員)  
(二〇一〇年七月二六日受付、二〇一〇年十一月三〇日審査終了)

---

## **Tadaatsu Ishiguro and Periphery of Folklore Studies : Focusing on His Activity at Kyodokai**

WADA Ken

This article examines the achievements of Tadaatsu Ishiguro who was a core figure in the history of modern agricultural policy, and his activity at Kyodokai, which was the contact point with Kunio Yanagita. The purpose is to clarify the influence of Yanagita's interpretation of rural villages and farmers in Ishiguro's measures and the practice by Ishiguro as a bureaucrat and a politician. The original place for his practice was the activity at Kyodokai led by Inazo Nitobe.

First, this article overviews the life of Ishiguro, and clarifies the contact point with people who were involved in his lifelong local studies and folklore studies. Next, it mentions the background of Ishiguro's interest in rural villages, farmhouses, and farmers, and how it related to the measures he worked on later as a bureaucrat of agricultural policy. Then, the article analyzes his report at the meeting of Kyodokai in which Ishiguro participated. Based on this, it investigates the research on tenant farming practice conducted later by him, the measures for controlling the rice price with which the food control system began, and his problem consciousness shown in the measures in the rural economic rehabilitation movement in the years just before the war regime. The report by Ishiguro at Kyodokai gives a glimpse of a viewpoint that considers the historical background of rural villages based on understanding of folklore in rural villages and farmhouses, and traditional social organizations. Ishiguro is recognized as an "unrivaled research enthusiast." He conducted nationwide research on rice production costs and research on tenant farming practices. His awareness of those large-scaled research activities is confirmed in his report on the activity at Kyodokai.

Although the consciousness toward modern rural villages and farmers common to Yanagita and Ishiguro needs to be studied more deeply, this article recognizes that it is the "cooperativity of labors in consideration of traditional practices and establishment of a rational organization based on that" and "cultivation of core figures who are capable of independent management." A clue to studying the above seems to appear in Ishiguro's report on his research presented at Kyodokai.

Key words: Tadaatsu Ishiguro, bureaucrat of agricultural policy, Kunio Yanagita, Kyodokai, measures for agriculture